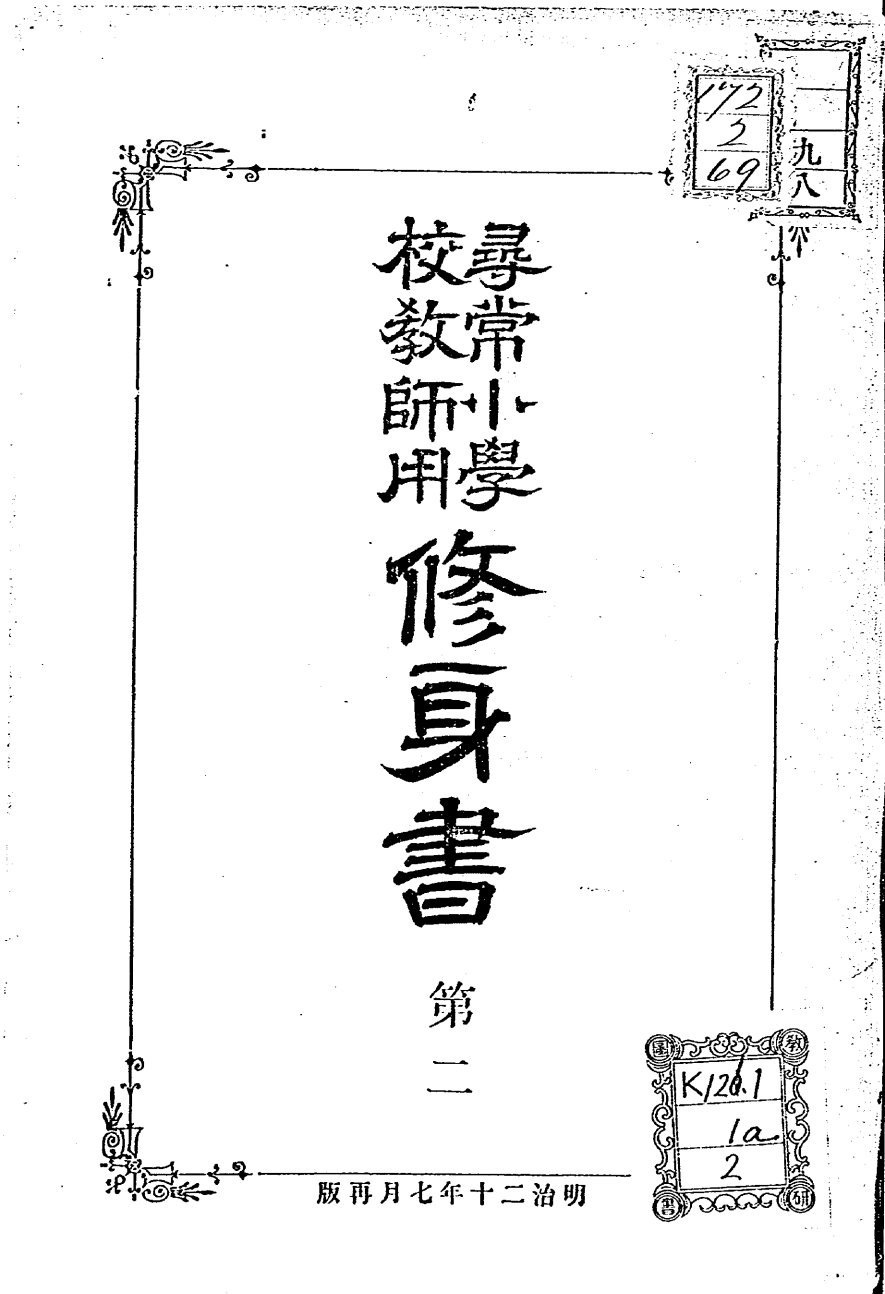


K121.1

1a

2



尋常小學教師用修身書

第二

版再月七年十二治明

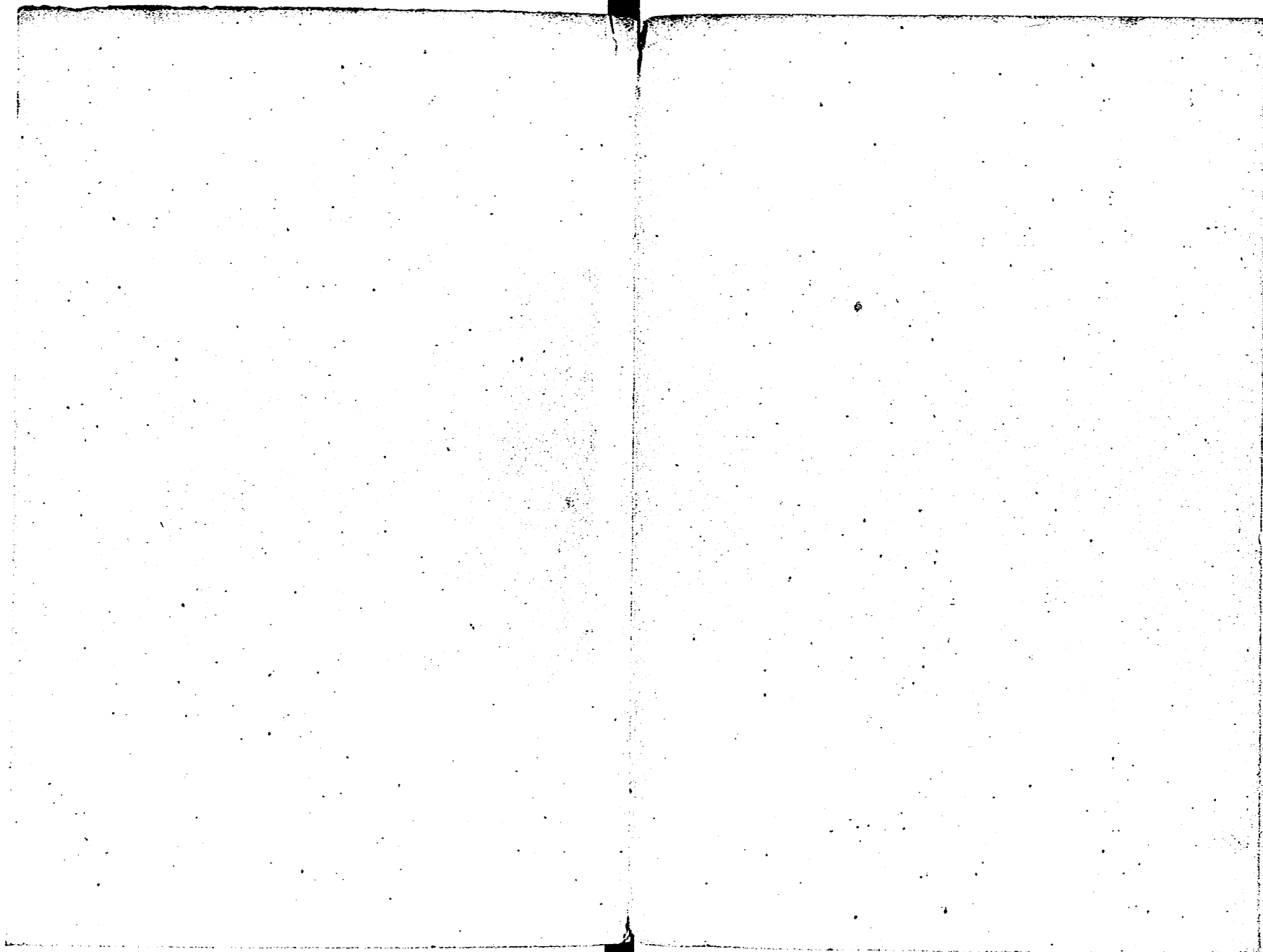
172
3
69

九八

K121.1

1a

2





尋常小學校
教師用修身書

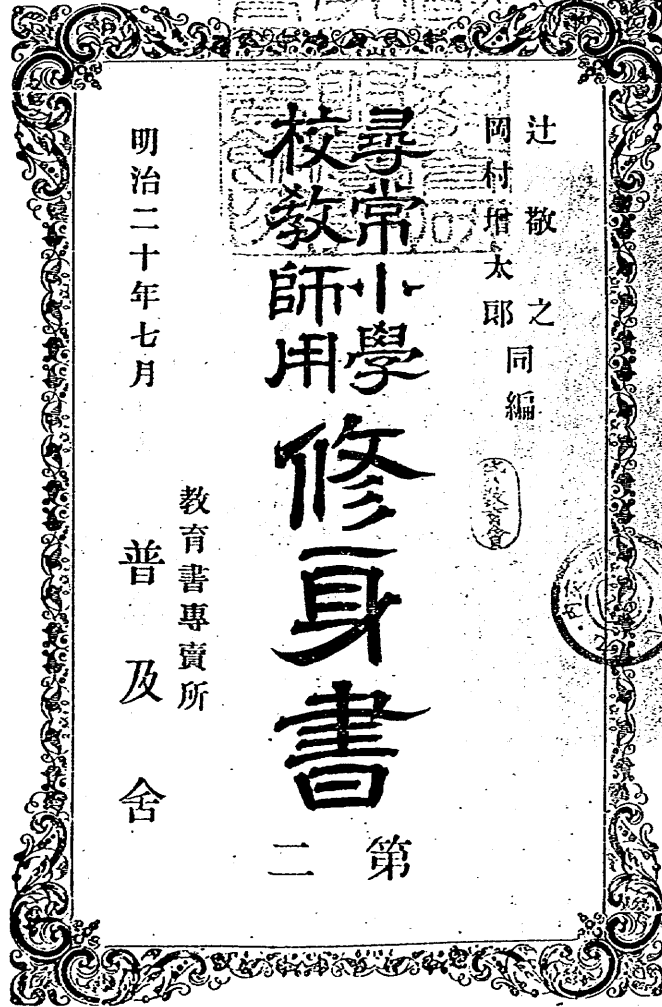
第二

辻敬之同編
岡村增太郎



明治二十年七月

教育書專賣所
普及舍

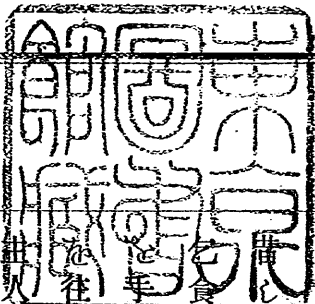


例言

- 一 此ノ書ハ兒童ノ徳性ヲ涵養シテ日常ノ作法ヲ教ヘ兼テ尊王愛國ノ道ヲ知ラシメンガ爲内外古今人士ノ善真ナル言行ヲ輯録シタルモノナリ
- 一 兒童ニ修身科ヲ教フルニハ談話ニ由リテ教師自ラ言行ノ模範トナラザル可カラズ故ニ此ノ書ハ分チテ教師用ト生徒用トノ二種トナシ教師用ノ書ニハ事柄ヲ掲グ生徒用ノ書ニハ其ノ圖畫ヲ掲グテ談話ヲ聞クノ傍之ヲ目撃セシメ又其談話ニ對スルノ格言ヲ載セテ之ヲ記憶セシムルモノトス
- 一 教師用書ノ上欄ニ問答ヲ設ケタルハ教師ガ談話ノ際往往此ノ法ニヨリテ兒童ノ心意ヲ開導スルニアリ又生徒用書ノ上欄ニ事柄ノ大意ヲ掲グタルハ兒童ガ父兄ニ依リテ復習シ若クハ他日自ラ誦讀シテ教師ノ談話ヲ再應セシムルニアリトス

(一) 忠狗警主を導く

〔忠義〕



歐羅巴のある都府に年老いて目盲むたるありけるが綱にて一疋の犬を繋ぎ其の綱よりてこれを道の案内者とし市街諸處を往來するにこの犬ハ甚利發なるのみならず其のたぬは深切をつくして曾て正一からざる振舞をさせしことなほこの盲人一週日の間二度同ト町を廻り得意の家の門に立ちて物を乞ふに犬ハ早く其の路を心得て案内し物を

問人ニ養ハ
ル者ハ如
何ナル義務
ヲ盡スベキ
ヤ

施すならんとおぼしき家へは軒別に立寄り盲
人の物を乞ふ間は其のかたへふ坐して休み既
に物を得るときて乃立て又次の家へ行き之を
待つこと前の如し或ば小銭など投げ與ふるも
のあるときと盲人にはこれを探ぐることに能ハ
ざれども犬は決して見失せざこれに口に啣み
て主人の手を持てる帽子の中へ入れ遂に一度
も誤ることなく或は家の窓より麵包の欠などを
を投げ與ふる時も主人より與ふるにあらざれ

は決して縦ままにこれを喰はせかならざ主人
に手渡しをせたりと云ふ固より乞食の犬にして
充分の養ひを受くを答なければ常に其の腹は
飢ゑたるべきよその心正しくして主人に深切
を盡すこと感ぜるに堪へたりといふべしもし
この犬の如く行狀の正しきものあれば人とい
へどもあつぞれの忠義といへるべし

(二) 小狗忠孝を全くす

〔忠義〕

紀伊の國湯淺の里に藤次郎といふ人あり一日

問人ニ仕フ
 ル者主人ノ
 命ニヨリテ
 ハ遂ニ孝ヲ
 廢セザル可
 カラザルカ
 將タ他ニ方
 法ヲ求メテ
 忠孝其ニ全
 クセンカ

他にゆき路よて子狗の甚あいらしきを見てつ
 れかへり家に畜ひけり一か夜にこの狗夜ごと
 よその母のところにてゆきてそのかたをらよふ
 一また魚の肉などを得るときハウならせ脚み
 ちちゆきて母犬と與ふその道のほどは凡三町
 あほりあり藤次郎大よおどろき感トけるが戯
 にこれをしかりて人の家ふ犬を畜ふは夜城ま
 もらしめんが爲なり然るに汝我家に畜はれな
 がら夜毎に外にありて己が職業をつとめざる

こそ不忠おれといひけるよ犬ハその夜よりこ
 て隔夜よ主人の家と母の畜れし家にふして忠
 孝とを完ふしけれどなん犬すらも尙その親
 を養ひ其の主人を敬ひ其の職分を盡すことを
 知るまゝして人たるもの忠と孝との道を忘れ懶
 惰放蕩にして犬に劣るの振舞はべからせ

格言

君に仕へては忠を盡して我
 が身を顧みること勿れ

参照

王達し屯田郎中季曇の僕なり曇罪よ連りて獄に繋せらるるに會す獄急迫なり親友と雖問ふ者なし達旦夕飲食を給し伺候せり曇貶謫せらるるふ及び達泣て之を送る防者之を遏む達曰く我が主人なり豈之を送らざることを得んやと後曇憤死を達働哭父子の如し終に其の喪事を治め佛舎よ殯して去る見る者爲に流涕と

(三)車夫親を愛して巡查の恵を得

〔孝道〕

東京淺草の聖天町に人力車を挽く者道の傍にうづくまり居れり通行の巡查これを怪み何事をふし居るぞ速に起てよと言ひければ車夫は已むことを得ずして立てり其の兩脛を見ればとんに墨よて染めにけり巡查其の故を問ふ車夫頭を垂れて涙を流し云ひけるは小奴が母ハ病にて旦夕に迫れどもこれを養ふの術なし些

(問)孝子貧困
コレヲ父母
ノ爲メ法則
ニ觸ルモノ
アラハ其達
法ヲ詭メシ
歟又哀憐ノ
念ヲ催サン
カ如何

少の車賃も乗客なれば得ること能て、今夕は如何ともなら難ければ脚絆を典して飯料も充てんと、これを質屋ふ持ち行けり、されども業を廢せるとき、又明朝炊くこと覺束なし、明朝の食を得んとすれば、赤脚ふして法に觸れん已むを得ずして、斯く爲せり宜しく處置あるべし、といひしかば、巡査は其の情實を憐み、一分の金札を出だし、典物を取り返し來れと云ふ、車夫悦びて質屋より走り、脚絆を取り脚に着くるを見て

巡査は其の場を去らんとすれば、車夫は懷より殘金と質屋の書券を取り出だし、巡査にかへて深く厚恩を謝したりしに、巡査はこれを取らざして、強ひて車父と與へて去れり、とぞ車夫の貧しき憐むべし、心な法を犯すの非を知る、と雖其の親を思ふの眞心たり、斯く爲せしものならん、巡査能く其の情實を汲み、違法の罪を蔽ふ、兩人の行ひ感ずるふ堪へたり

(四)母の貧をいたみて車夫とな

る

〔孝道〕

東京淺草花川戸町に大竹新兵衛といふ商家あり此の家の丁稚竹二郎といふは性質温順なるを以て主人も之を愛し其の長男幹一の看護を任せねき幹一が小學校に通ふ折は毎に附添はせ側に侍りて萬事の世話をふさしめたるは竹二郎は教師が生徒へ授業するを見て竊かに之を習讀し殊に修身學の講義等の時に進みて傍聽する様ふれば教師も早く之を覺りて感心さ

る童子なりと折折物をぞ恵みしことありしがある時敷入として主人より一日の暇を貰ひ久いぶりにて其の實家なる本所中之郷原庭町の母親方へ歸りしかば母親は非常な喜びしが餘程の困難と見え菓子とへ買ふて與ふると能わざる様子を竹二郎は氣の毒に思ひ小遣よとて主人より貰ひ受けたる金五拾錢のうち四拾錢を母に贈り此の後は何としかして時時小遣錢を參らすべければ必心配致さるまゝなご種種に

慰め終日遊び暮して夕刻主人方へ歸る時残りの拾錢を以て菓子麵包を求め之を幹一の土産とせしと尋常の小供の爲し得べき事ならぬは母の困難を知りて心を痛めたる故にや氣分わるゝと其の夜は早く寝ねたりしが翌朝何へか出で行き戻らぬより主人は驚きて其の實家ハ勿論諸處を搜索せしも更に知れざりしかは痛く心配して其の始末を疑ひ明日は其の筋へ届けて尙ほ尋ねんと打臥せし夜の十時どぬ

竹二郎ハ雨に濡れて歸り來りしかは何れも案ト暮せし旨を告げて仔細を問ふに無斷よて外出を爲し御心配を懸けたるは罪多き事ながら申し出でなばれ許しなきことと竊に外出せしは昨日敷入に只一人の老母が非常に貧しき體を見るに忍びず頂戴せし金子を贈りしが尙も此の上も日日僅かつつにても仕送りて老母に心配を致さすまと思へど奉公の身にあり且小供の事なれば錢を得ることならぬと親を

一四
養はん一心にて人力を挽き稼ぎなば日に拾錢
内外の錢ハ得らるべしと思ひ立ちしも能く其
の事を爲し得るや否や自分にも覺束あげれば
一日試み志上にて出來る業ならば其のとき御
暇を戴き人力挽よならんご今日試みよ出てた
るなるが客を乗せんよは營業鑑札を所持せぬ
はならずされは餘儀なく懇意の者ふ頼みて一
輛の古車を借受け近所の子供等に乗せて終日
明地を挽き回し腕腰の力を試したるに少しも

疲勞せず尙二三町の處を走り得べき様よ覺ゆ
れば斷然車夫となりて老母に孝養を致したま
ままいご申し兼たれご今日より御暇を賜り且
是迄賜はりし御仕着の衣類を其の儘頂戴致し
たしご他事をき請に主人を始め一同感心し折
角の思ひ立ちを妨げんも如何なりご請ふが儘
に之を許し外に金錢衣類等を與へければ竹次
郎は喜びて其の翌日實家へ歸り直に人力車の
營業鑑札を其の筋へ出願せんといふを聞き大

竹へ出入の者や近隣の人人が協議のうへ金を
贖して一人乗りの人力車一輛を買求めて竹次
郎に贈ることとなりしかば學校の教師も奇特
のことなりとて脩身學講義の際生徒に對して
此の竹次郎の行爲を例に引て親孝行を心掛く
べしと説きしに生徒等も感動せしものと見ゆ
各若干の錢を出し合ひて之を竹次郎に贈りた
しと教師へ申し出せしにぞ早速同人方へ届け
て尙其の身體を愛し其の孝養を怠ることなか

れと懇ろに諭したりといふ

格言

大學に曰く人の子と爲りて
は孝に止まる

参照

渡邊子觀ハ出羽の人なり曾て江戸に至り
紀平洲に就て學ぶ郷信あり父の病を報ず
子觀書を捧げて號泣し即日途に上る時に
臘月寒甚し雪を犯して返る病に侍するこ

じ一年衣帯を解かず父遺言して曰く必業
を廢むること勿れと服終りて復遊學す

(五)鳩蟻相救ふ

〔報恩〕

一匹の蟻泉水の涸とりへ這ひよりて水を飲ま
んどすゝま誤まりてその中へ落入り浮きつ沈
みつ苦しみてあてや溺れ死あんとする時岸邊
の木の枝に一羽の鳩のとまり居たるがこの體
を見て氣の毒に思ひ木の葉を一枚啄んで蟻の
浮きて居る水の上へ落したり是に於て蟻は大

に力を得て直よその葉の上へはひ上り兎角し
て岸へ流れ付て危き命を助けりけりかあるとこ
ろにこの家の愛子と覺しきが吹矢を携へて出
て來り木の葉の間より彼の鳩を見つけ吹きと
らんどねらひを定むる時蟻は突然に愛子の踵
に噛み付きたれば愛子ハ驚きて躍り上るに鳩
ハ心づきて飛去りける

(六)長鼠恩獅に酬ゆ

〔報恩〕

ある時獅子洞の内にて晝寝したりけるに一匹

問人ニ恩ヲ
施スハ己ノ
爲メヨモ益
アル義ナル
ヤ如何

の鼠出ててあちらこちら駈け廻るうち計らず
も獅子王の鼻の上へ駆け上りけり是に於て獅
子ハ奮然として目をさまし矢庭よ鼠を引攪み
て一ひしぎよひしぎ殺さんせし鼠の甚悲
しげに叫ぶを見て哀れとや思ひるん拳を開ひ
て放ち遣りける其の後幾程もあらずしてこの
獅子獸を追ふて野を馳せ廻るとき誤まつて狩
人の造り設けたる掛置にかかり大に驚きて逃
れんどあがけどもあがけばあがくほど繩をま

りて如何ども詮方なく大聲を發して吼え狂ふ
時前日放ちたる鼠この聲を聞きて馳せ來り獅
子の身に纏ひつきたる繩を嚙切りてこれを救
ひ出しけり

格言

諺になさけは人の爲ならず

参照

晋の毛寶江に遊びて漁人の一白龜を釣る
を見て之を買て歸り瓦盆中に置いて之を養

ひ其の漸く大ふるを待々江中に放つ後寶
豫州の刺史となり石季龍と戦て敗れ江中
に陥りしに白龜之を載せて東岸に達せり

〔七〕堪忍を以て集りたる家族

〔忍耐〕

唐の高宗皇帝ある時天下を巡見して壽張といふ處に到り給ひしに此の地は張公藝といふ人ありて九代が間家を分たず祖孫父子兄弟姉妹伯叔等大勢の男女一家の内に住みよかも至つ

〔問家爭論ナ
キハ何ニ因
テ然ルヤ

て睦み和ぐよと聞えければ高宗其の宅へ臨幸あきて主人に問ひ斯る大勢の家族を治めて斯く穩に靜ならしむること何か方便のあることとよや奏聞すべしと詔給ふ公藝は何の詞もなく筆をとりて堪忍堪忍堪忍と凡百餘字を書きて奉りたりしと云ん

〔八〕堪忍の二大人

〔忍耐〕

明の代の陳白沙といふ人ある時友人の莊定山を訪ひしに其の歸る時定山舟を買ひてこしを

送るに乗合の中に一人の士ありしが其の人滑稽多辨にして縦まよ事と談ぜしうは定山を甚怒り殆ど忍ぶこと能はざりし程なりしに白沙は然らず其の人の談ずる間ハ其の聲を聞かぬさまにて居り其の人の既に去りし後にハ其の人を忘たるが如くにてありしかば定山大に其の寛洪に服したりとぞまた同時に毛仲權といふ人あり曹州といふ地の知事となりし時一人の書生ありて書を知事と獻したるが其の語

問他人ヨリ
誹謗ヲ受ク
ル時ハ如何
スルヤ

傲りて動もすれば謗れるかど多かりしかば僚吏屬官等は皆堪ゆること能はざりしに仲權は坦然としてこれを坐に延き懇懇にこれに謝して吾として平常斯る規言を聞かぬを冀くは過失を寡くすべしといひしにぞ時の人皆其の大度を稱しあへり

格言

讀書錄に曰く忍ぶこと能はざる所を忍べ

富弼の曰く忍の一字は衆妙の門なり

参照

宋の韓琦百金を以て一の玉蓋を買ひ之を珍とす吏誤て地に墜し之を碎く坐客驚愕す吏地に伏して罪を待つ琦笑て曰く物の破るも定數あり汝奚ぞ罪あらん

(九)英主蟻を見て感發す [勉強]

韃靼國のテムールは世に名高き人なり或る時

[問]汝等微虫ノ物ヲ運ビ或ハ巢ヲ營ミナドヤテ百敗沮マザルヲ見テ如何ナル感覺ヲ起スヤ

の戦に敗北を取り獨り身を脱し矮屋の中に匿れたるときふと其の屋の中に蟻の麥粒を壁の上に輸ぶを見るに其の粒を地に墜せんと六十九次なりされども更に屈する體なく遂に七十次にして壁の上に達することを得たりテムール王はつくづくこれを見て思ふやう余今日殆ど心神を失へりされど今此の事を見て再志氣を振ひ起すことを得たり余これに銘して終身敢て忘れずとて其の後遂に敵國を打

ち破りてその國を興せりとぞ事をなすに少く挫折するとも心を沮すること勿れ精神一たひ奮ふときてふんぞ再造に難からんや

(一〇) ヨングの勇

(勉強)

英國の學士 ヨングといふ人ハ常に曾て爲せしことハ必これをふり得べしといへり故にヨングはその爲さんと志したることハ何等の難事に遇ふとも屈せしことなりヨング始めて馬に乗りし時々の同伴せし人ハ騎馬の達人なれば

[問] 容易コナ
シガタキ事
チナサント
スルコハ如
何コソテ可
ナルヤ

ひとたび鞭うつとひとしく路ふあたるどころの高柵をとびこしたりヨングハこのさまを見て我も劣らトと馬を躍らせて飛はんとしたれども忽地におちたりしかば再馬ようちのりこえんとして又ねちんとせるとき力を極めて馬のたてかみを攫みければ漸くにしておちず此の如くすること三度に及びてついにこれをしてゆることを得たり凡事業を成さんとするよいかなる艱難に遭ふともたたまざるときは

遂ふ目的の地は達することを得べし學業もまたしりりよみ難き書を難き業といへども間斷なくいく百べんを重ねなほ必これと遂ぐることを得べし

格言

漢の光武皇帝の曰く志あるものは事竟に成る
西語に曰く天下は勉強忍耐なる人の所有なり

参照

唐の李白少年のとき學業未だ成らず業を棄て歸る道として一姫の鐵杵を磨ぐに逢ふ李白之は何を爲すかと問ふ姫の曰く鐵を作らんと欲すと李白其言に感ず遂に還りて業を卒る

宋の張絳家貧くして未だ書を讀むことを知らず市家ふ備はる會、呂官の傳送して過るを見て心よ之れを羨み問て曰く何を以

てか此ふ至るや人の曰く書を讀んで此ふ至るなりと鋒乃ち憤を發して力め學び業を伊川先生ふ受く終に伊洛淵源の學を得たり

(一一)才童雲月を論ず(才智)

佛蘭西の碩學ペートルガセンヂ生れて四歳の時よりよく書を讀み追追成長するに隨ひて山に登り野邊に出でて日月星辰を詠るを以て樂とせし往往夜中俄に起きて天文を視ることなどありある夜同じ年頃の子供兩三人と遊び

〔問人ヲ論ス
ニハ空論ヲ
以テスルト
實例ヲ擧グ
ルト孰レカ
優レルヤ

居たる折しも満月かがやきて晝の如くなるに薄き浮雲風に吹かれて月の邊を飛びて雲の間に月の走るが如く又月の前に雲の動くが如く子供等はこれを見て彼の動くものは月なり雲かといふ爭論を起し皆口口に動くものは月なり雲は靜にして處を移さずといひけれどもガセンヂは獨り説を定めて月は動かさるにはあらざれども其の動くまじ人の目に見ゆる程に至らば今彼の動くが如く見ゆるは全く雲の走る

に由て斯く見ゆるなりと云へど他の子供は其の道理を聞分けず尙も銘銘の説を云張りて屈せざればガセンチはやがて一の工夫を運らうてさらば此方へ來給へとて大木の下に連れ行き其の枝の間より窺びしめしに果して月ハ同ト枝の間に止まりて動かす實に走るものハ雲なりけりされば片意地なる子供等も此の證據を見て始めて月の走らざることに合點往きガセンチの説に服したりといふ

(一一) 甕を碎いて童を救ふ

〔才智〕

宋朝の名臣司馬溫公といへる人幼きとき多くの童子とともに或る家の庭にて遊びたり其の庭中に大なる甕に水をみてたるものあり一人の童子其の甕によぢのほりて甕の縁をまわりあゆみてたばをれたりしがはからずも足をふみばづいて甕の中に落ちたれば多くの童子等如何にせんと狼狽に騒ぐのみにてすくひ

〔同〕重寶珍器
ト人命トハ
孰レカ貴重
ナルヤ

出まべき工夫にては更にあかりけるに温公は
手早く大なる石をひろひ來りて其の甕をうち
くだかんじりたれば他の童子らまた打驚き之
を碎きたらんには主人の怒りふふれふんとい
ふ温公は一の甕をくだくば至つてかろ一人の
命は至つて重しといひもあへど石をなげうち
て甕をくだき溺れたる童子を救ひけるこの温
公生長ののち朝廷に仕へて宰相となりぬかの
資治通鑑といへる大歴史に此の人の著述なり

格言

西語に曰く工夫は才知を進
むるの階梯なり

参照

魏武帝の子に倉舒と云ふ人あり後に鄧の
哀王冲と云ふ少時才氣人に勝れて非常の
智あり吳王孫權嘗て巨大の象を武帝に獻
じ武帝其の重を知らんと欲し群臣に問ふ
に衆敢て答ふるものなり倉舒時に僅に五

六歳側に在りて曰く先づ象を船に乗せ船脚の沈む所を記し後物を以て之に積み換へて量らば容易に知ることを得べしと武帝大に悦び之を行ひしと云ふ

(二三) 幼童仁慈履を貧兒に與ふ

〔七愛〕

西洋のある國にポールと云ふ童子あり此の童子或時學校に行く途にてシヨルシホワイトと云ふ小童の木片の上に泣き居たるを見て汝何

〔問〕汝等貧乏
ナテ其心善

を悲むぞと問へば我硝子の屑を踏みて右の足を傷ひたりと言ふポールは其の疵を見て汝の父ハ履を買ひて與ふる事能はざるかと問ふに我は父母既に没して今ハ叔母に養育せらるれども叔母には八人の子ある故に履を乞ふ事を憚るなりといふポール云はく汝叔母の入費を思ひて履を乞はざるハ感ぜるに堪へたり今我學校に往く途なればせんかたなり汝一時頃に我が家に來りおは吾汝を助けんと言ひて兼て

其ナル童兒
ヲ見ハ如何
ナル感覺ヲ
生ズルヤ

花炮を買ばんとて貯へ置ける貨幣を出し今善
き用ひ所を得たりとてシヨルシと共に沓師の
許に往き美しく堅固なる沓を買ひて與へ
かはシヨルシの悦び言ふ計りなく成長して後
も其の深切を忘れぬ爲とて年年好き梨子を遣
りしぞ

(二四) 髪を賣て餓者の命を繋ぐ

〔七 愛〕

亞米利加のライサンと云へる町に貧しき女子

〔問〕汝等貧女
が父母ノ食
セザルヲ愛
ヒ餅ヲ竊テ
拘引セラレ
ントスルヲ
見ハ惻隱ノ

ありしがある日市中の菓子店にて餅を竊めり
商人怒て警察署に訴へければ警吏直に來り彼
の女を拘引せんとするを人人群り來りて見物
せしガラッスといへる少女群衆の中にあり此
の有様を見て深く憫み貧女に事の始末を尋ね
ければ貧女は涙をぬき拭ひ妾が家貧くして父
母兄弟はや五六日も絶食に及べり妾今この餅
を以て家に遣らんとして斯る辱めにあへりと
語りければラッスはその家を問ひ定め吾が家

心ヲ生ズル
ヤ否ヤ

〔問〕少女國法
ノ爲メニ拘
引セラレ其
一家飢餓ニ
迫ルヲ見バ
痛痒相關セ
ズンテ可ナ
ラン歟

に歸りーが折ふー父母他行して金を求むるに
道ふかりーかは隣家の髷師の許に往き己が頭
髪を賣らんことを乞へり髷師常にラツスの髪
の美しきを譽め戯れに娘子が髪を賣らんと
らば千金にても買てんといひーが今急にラツ
スの髪の毛を賣らんといふを聞き怪みてその
故を問ふにラツス事の子細を告げければ髷師
大に感じ價よく買ひ取れりラツスはその金を
得て一つの籠を求めこれに食物を入れて貧女

の家に尋ね行き彼の父母に對ひて君が家の娘
子ハ今日故ありて歸り玉はじとれども決して
心にかけて玉ふまじ妾君が一家の食物乏しきよ
しを聞きこの食物を持ち來れり僅かふれども
一時の飢を凌ぎ玉へといひ籠を與へて家に歸
れりラツスが父母早くもこの事を髷師に聞き
て大に悦びラツスが歸りを門外に待受けてそ
の仁惠のふるまひを褒め稱へけりこれより人
人ラツスの仁心に勵まされ皆争ふて貧女の家

と郵みけること

格言

斯邁爾斯の曰く幸福は仁愛より生ず

參照

宋の瞿華郷善く恩を施す一友あり甚貧し瞿之を憫み白金一鎰を贈る人の知て再び贈り難きことを恐れ窓隙より之を投ぜ

(一五) 虞芮の争ひ讓に化す〔辭讓〕

〔問虞芮二國ノ君田地ヲ争ヒシガ周人ノ辭讓ヲ見テ如何ナル感覺ヲ生ズルナラン

昔一支那に虞芮と云へる二ヶ國ありしがその君互に田地を争ひて決せざりしかば周の國よ訴んとして二人周の國界に入りければ耕す者は畔を譲り行く者も路を譲り男女道を分ちて行き斑白のものは物を擔てぞして壯者これよりその朝廷に入れは士と太夫も譲りその禮儀いと嚴かなりければ二國の君感じ入り我等の争ふ所は周の人これを愧づ何としてその朝廷へ訴へらるべきぞとして互にその田を譲りて取ら

ざりーとぞ

(一六)黒田彦左衛門戦功を人に

譲る

〔辭讓〕

黒田彦左衛門は柳原康勝の臣下なり大坂の役彦左衛門一の甲士を撃ち殪し其の首を斬らんとせし折友人三枝勘兵衛來りければ彦左衛門これを棄てて立去れり勘兵衛後より呼び止むれども聞らざるふりて馳せ行き又敵の一將を撃ち殪せり大坂落城の折康勝病氣にてみま

〔問〕彦左衛門
敵ノ首級ヲ
獲友人勘兵
衛ノ來ルヲ
見テ棄テ去
リシガ其棄
テ去リシハ
如何ナル理
由ナリヤ

かりければ家康公久世廣之坂部廣勝の二人に命じて柳原氏が臣下の功を論ぜしめけるよ勘兵衛首級を獻じ兩使に向ひこの首級こそ黒田彦左衛門が獲しものなり彼れこれを棄て去りたり故に臣これを拾ひ取り候といひければ兩使彦左衛門を召してこれを尋ねらるるに彦左衛門更し知らざると對ふるを勘兵衛承知せざりて子の嚮きに鎗にて此の敵を殪せり吾後よ呼べども子聞かざりて棄て去れり故に吾詮方

なく首級を携へ來れり何ぞこれを知らせといひ賜ふぞといひければ彦左衛門答て吾決して覺えなるといふを家康公聞き給ひて深く其の辭讓を褒められけり

格言

王利の曰く能く讓りて以て得ることとなす

参照

蘇瓊守と爲る乙普明兄弟田と争ふ瓊之と

諭して曰く天下得難き者と兄弟得易き者は田宅假令ひ田宅を得るも兄弟の心と失へば如何と普明兄弟泣て罪を謝す

(一七)脱走の婢を責めず〔王利〕

齊の房文烈と怒りることなき人なり霖雨の時食糧の絶えしかば下婢に米を買ていぬがその下婢性質放恣にして何處へか逃げ去り行方知れざりければ三四日も詮索して漸く尋ねあて汝何れの所に往きて食を求めいぬひて

その逃—ことなど問はざり—とぞ

(一八)朝服を汚して顔色を變ぜ

す

〔溫和〕

〔問人ノ過失ヲ見ハ之ヲ譴責シテ改メシメンガ又寛容以テ之ヲ待テ自ラ過テ悟ラシメンカニ者孰レカ可ナルヤ

東漢の世に劉寛字文饒と云へる人あり性質溫和にして常に輕—く物言とぞ遠てたる顔色なかり—かばその妻試みにこれを恚ら—めんとして參朝の折り嚴め—く裝束きたるを伺ひ侍婢にいひ付け肉羹を捧げわさと翻して朝衣を汚と—めしが寛顔色常々異ならざ徐に汝が手

羹は爲めに爛傷せざり—かといへり

格言

西諺に曰く溫順は愛敬の母なり

又曰く強暴は笑を招き溫柔は已と益す

參照

宋の呂蒙正參知政事たり朝士あり之を指て曰く此の子も亦參政か蒙正伴りて聞か

ざる爲ぬして行く全列其の姓名を詰らんと欲す蒙正之を止め曰く若し一たび姓名を知らば終身忘れど知る無きに如ざるなりと

(一九)親に事へて其の心を慰む

るど旨とす

〔孝道〕

寛永の頃雲州松江の城主堀尾家の士に伊達治左衛門といふ人ありけり俸祿薄き士されども父母ふ仕へて孝心深く食物ふハ常に鮮けき魚

〔問父母ノ命
區區ナル時
ハ如何スル
ヤ〕

旨き酒をすすめて父母の心を慰め其の調理も已みづからして敢て奴婢等に任せざとれ其の極めて清潔よせざらんことを慮りてなりまた其の調理の烹焼きする折にはかならむ父母に向ひて恭しく問ひけるは今日何れの處より某の魚を得候ひぬ如何調理仕るべきや御恩召のままに計らはんといふに或時父は鱸につくりてすすめよといひ母は焼物にして食はせよといふ事などありて其の好むところまらまら

問身體ノ強
壯ハ父母ノ
意ヲ慰ムル
ニ足ルト思
考スルヤ如
何

ふれど治左衛門更に其の意に違ふことなく一
つの魚を半ふ分ちて父には鱈母は焼物とな
してまいらするなど何れも其の心は適ふやう
に勉めまたわが室へ父母の來らんといふ折は
かならまづ口に適ふべき食物を調へ座を清
め茵を設けておかる後父母の室へ赴き愉顔
にして請ひけるよ、某此の程は格別壯健よし
て身の肉肥え膏づきて候ぬがはくは慈親某の
力量の程を御覽せられ候へて乃まづ父を背

負ひて庭より下り徐かき庭中を散歩したる後こ
れを己が室に伴ふひその後また母を背負ひて
これを伴ふこと猶初の如くまた所用ありて
他へ出づる時はかゝらまづ父母に見ゆて其
の趣を告げて他所にて見聞きし事など打諱
らひ父母の心を慰めたりとやかやそれは國主堀
尾家に於ても深く治左衛門の孝心を感賞せら
れをりをり鮮魚珍菓など賜はりて其の父母を
慰むるの料に充てしめられしとぞそれは時の

人みなめでいつくしみて國中孝子をきにあら
ざるも伊達氏の如きはあらざといひけるぞ

(二二〇)親に事へて煩を厭はず

(孝道)

京都の堀川に窮樂といふものありけり其の母
老病に臥せりある時客來りて窮樂と次の間ふ
て物語りぞるとき暴ふ雨ふりて堀川の水忽増
して漲り流るる音の高く聞えり老母怪みて
窮樂をよびて何の音ぞと問ふ窮樂詳らふ其の

由と述べて水音にて候と答ふれば母はさにも
あるかと打ちうなづけり窮樂席にかへりて間
もなきふ母また窮樂を呼びてあのかめしき
音のぞるも何ぞと問ふ窮樂謹みてあれは堀川
の水増して漲り流るる音候と初のごとく答
ふれば母笑ひてさにてあつるかと言ふにま
たかへりて客に對すれば母また窮樂と呼ぶ聲
の中より立ちてゆくに母問ふこと前のごとく
なればまた前のごとく答ふ客あやしみて君は

問父母老耄
レテ屢一事
ヲ問フ時ハ
如何答フベ
キヤ

何とて煩しく屢前のごとく答へたまふがな
とて前へに申したる如しとて言ひはなちたま
はぬぞと問ふに窮樂頭をふりて否君の御心を
へさることなれどもちかせぬ故は母老病に犯
されて今も聊臺せざるさまになりて唯今問ひつ
る事をもたちまち忘れて幾度となく問ふこと
も皆始めて問ふ心をせば我も始めて問はる
心にて答ふるなりと加たるは客甚感賞したり
とて窮樂ハ非凡の孝子なり古語にも孝子は志

を養ふといへり母よつかへて其の心を續密の
奥よそそぎとせよ答ふる一語大に味あり世の
子たるもの父母の二をひ同じ事を問ふことわ
きは動もすれば煩はしとて答へぬもの稀に
はなきにあらざ人の子たらんものハ能く窮樂
の心を學ぶべきなり

格言

曾子の曰く孝子の老を養ふ
や其の心を樂ましめて其の

志に違はず

参照

晋の王延親に事へて色養す夏は枕席を扇
ぎ冬は身を以て被を温む隆冬盛寒體常よ
全衣なくして親にハ滋味を極む

(一一)溺るるは我が子なり

〔陰徳〕

支那國の高郵といふ處に張百戸といふ人あり
けり年既に老いてただ一人の男の子を持ちけ

〔問人ノ危キ
ヲ救フハ人
タルノ務メ
ナルヲ以テ
歟將々自ラ
好ムテ爲ス
モノ歟如何

りある時張百戸官府の所用にて淮安といふ處
へ赴きたるが公事殊の外手間取りて一年あま
りも逗留し漸くにして歸り來る途に揚子江と
いふ大川を渡る折りから大風俄かに吹き出で
る舟をやるべくもあらざれば暫く岸邊に碇泊
して風のなぐを待ちしに一艘の舟風の爲よ覆
されて江中に漂ひけるが其の舷よ一人の男と
りつきて泣き號ぶ體なるを見て張百戸あはれ
に思ひあたり繋ぎたる漁舟をかたらしめてあ

六二
の舟救へやといへど難風の折なれば我往かんといふものなれ是に於て張百戸ハ旅包みの中より許多の銀子取出して漁夫等に示し能く彼の漂流人を救ひ來りしものにて此の銀子をとらずべしといふ漁夫等は銀子を見るより忽ち勇み立ち手に手に舟を押し出さ風浪を侵して漂流船の許へ漕ぎつけ兎角して彼の男を救ひ來りければ張百戸大に喜びてこれを見るに何ぞ圖らん是れ我子にて父は久しく歸らざるを打

ち案じて迎へよとて來りしなりければこそ思ひがけずとはかり父子手に手を取りかはして其の無事なるを喜びしといふ

(二二) 僮を得て子に遇ふ [陰徳]

支那國何れの時代にや大學生景生といふ者他郡に流落ひてありし間に家も残り置きたる一子を悪漢に拐去されしが景ハ他郷にありて此の事を知らざりけり儲備書すること數年よして僅に銀三兩を餘まじたるが偶一窮人の妻を

驚くを見て大にこせを慙れみ慨然として之に贈るに苦辛して得たる金三兩を以てしたれば窮人夫婦完きことを得て感謝して去れり明年に至り彼の窮人金を得て持ち來り厚く禮謝して還したれど景は猶ほ其の貧ならんことを念ひて堅く受くることを肯ぜざりて夫婦は心大に安からず景生の炊爨を親らするを見て乃一人の小廁を買ひて之を送れりされは景も已むを得ずしてこれを允したれば窮人此の小

廁を携へて門に入るふ及び之を見ればよ如
何に即ち景生の扮されたる子なりしかは景生
ハ悲と喜とに堪へざりきされば此の事を聞く
者歎異せざるハなかりしとぞ

格言

語に曰く陰徳ある者は陽報あり

參照

宋の蕭振浙江に居り平生好みて善を行ふ

江瀆の過客時に飄溺の患あるを見る因て
巨舟を造り工を募りて人を濟ふ人其の徳
を頌し其の地を名けて蕭家渡と云ふ後成
都の大守となる

(二二三)三年訓誡の辭を誦す

(學藝)

晋の趙簡子といふ人子二人ありて長男を伯魯
と云ひ二男を無恤といひけるがある時簡子二
子の才を試みんとて訓戒の辭を二通書きて二

〔問〕一度授け
テレタル書
翰ハ常ニ反
復讀誦シテ
之ヲ記憶セ
ンヤ否

人の子供に授け汝等兩人よくよく此の辭を讀
み覺によじて與へけりされば二人の子供はト
めの程をあげくれこれを讀誦して習ひ覺にん
どしたましが年月を経るに隨ひ伯魯の方は何
時にかにこれを怠りて絶えて讀むことをかり
けり叔三年ありて後父簡子二人の子供を招き
かねて授けつる訓戒の詞は如何に讀みけん覺
ぬつるやと問ふに伯魯は其の詞を忘れ果てて
一字一句も答へをなさず父またさらば彼の書

付いづくよあると尋ぬるよ既にとゞすら失
ひぬ然るに無恤と如何にじいふよこれは兄よ
まさりて賢ければ言よとみふく其の詞を諳誦
したるのみか其の書付をも懐より出してこれ
を父に呈したりとぞ

(二四)四百篇中一字を遺れず

〔學藝〕

後漢の世よ蔡邕といへる人に文姬といへる娘
ありて六歳のとき善く音律を聞き受けたりと

問] 蔡文姬が
能ク父ノ遺
書ヲ記憶シ
タルハ如何
ナル術ヲナ
シタルニア

の父ある夜琴を調べし折その一の絲きれしか
は文姬にいづれの絲きれしやと問ふに文姬答
へてそは第一の絲なりとじいへり父訝りて想へ
らく文姬が言葉折よく當りしあらん故らよ又
一つの絃をさりて問ふに第四の絲なりと答へ
たり年二十歳の頃胡兵の爲ふ捕へられしを魏
の曹操文姬が父と知りあひありしは金玉を
胡人に與へ文姬が身を贖ひて歸れり曹操文姬
に父が遺書は如何せしやと尋ねられは文姬の

○尋常小学校教師用修身書第一

いへらく父の書は妾が虜へられし折り失ひき
されども四百餘篇を覺へたりとて直ちに去れ
を記して一字も遺さざりしとぞ

格言

西諺に曰く記憶は思慮の庫
なり
義地活士の曰く才智の均か
らざるは幼より心思を用ふ
ることを習養すると否らざ

るとに在り

参照

元の許衡七八歳ふて學を郷師に受く讀書
一たび目を過ぐれば忘れず一日其の師に
問ふて曰く書を讀むは何を欲するが爲め
なるや師の曰く試験に應じて及第するに
在り衡の曰く斯の如きのみかと師大よ之
を奇とす後元に仕へて大學士となり魏國
公に封ぜらる

尋常小學校教師用脩身書第二終

全全明治二十年二月十日出版權免許
年二年二月十日出版權免許
年七月十二日再版御届

定價金十五錢

編纂兼出版人

熊本縣士族

辻 敬 之

東京下谷區
練塀町十四番地

東京府平民

岡村 增 太 郎

東京神田區
松永町十九番地

編 纂 人

發 兌 所

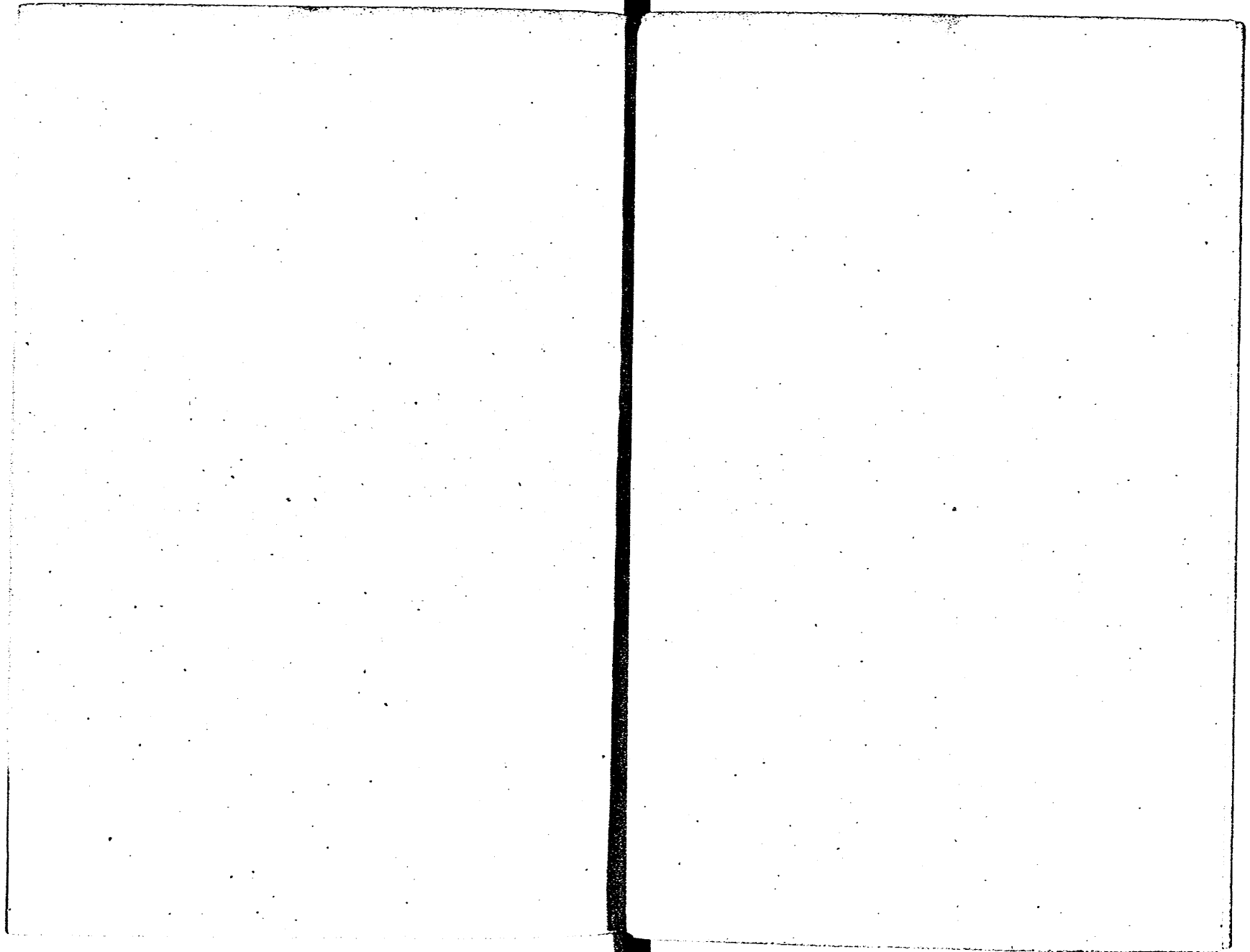
教育書專賣所

普 及

東京下谷區
練塀町十四番地



1221/



大日本教育會館

九	一
八號	三函
四册	